

九重の間

水無月

結莉

頭が痛い。

昨日の親睦会でお酒飲み過ぎたかしら？

けど、起きなくちゃ、仕事に行かなくちゃ。

今、何時？手を伸ばして目覚まし時計を掴むと時刻は7時。

やっばい、起きなくちゃ遅刻しちゃう。

布団から出て、クリーニングから帰ってきたスーツに身を包む。

洗いたての香りが私を包む。

私の名前は中村 香織。

公立中学校で教師を行っている。

教師歴は秘密。

だって、まだまだ若手なの。

失敗だってする、今現在のように。

冷蔵庫から卵を2つ取り出してフライパンに割り入れる。

熱したフライパンからはジュウという音が出る。

ああ、ペーコンを入れ忘れた。

けど、いまはそんな事より時間を気にしなくては。

誕生日にもらった腕時計をつけ、鞆の中に必要なものをつっこむ。

今日は、勤め先の中学校での入学式。

私の生徒になる子たちが沢山入ってくる。

って、ああもう。目玉焼き焦げちゃったじゃない。

もういいわ、気にしていたら遅刻しちゃう。

ハイヒールに足を突っ込み家を急いで出る。

いってきます。

学校に着くと、私が一番後だった。
教頭先生には遅いって怒られた。
でもしょうがないじゃない、眠かったんだもの。

ふぁ、とあく口を押さえながら自分のデスクのところに行く。
どうやら私はE組を担当するみたい。
どんな子たちが入ってくるのかしら。
楽しみだわ。

その後、同学年の先生たちと少し打ち合わせをしたあと、体育館へと向かう。
最終チェックだ。

椅子は綺麗にならんでいるか？

飾りのリボンは斜めっていないか？

花は綺麗に咲いているか？

よし、どれも準備よし。

二重丸だわ。

エクセレントよ。

と一人で笑みを浮かべていると、後ろから肩を叩かれた。

校長先生だ。

嬉しそうですね、だって。

当たり前じゃない。

初めて担任になるのよ？

これ以上の幸せはないわ。

そんな風に返すと、校長先生は声をあげて笑いながら向こうに行った。

ふんっ。

入学式が始まると、新品の制服に身を包んだ生徒たちが入ってきた。
スカートだってちゃんと膝上15センチ。
髪だってきちんと結んでいる。

みんな、素晴らしいわ。

私のE組には素敵な子が沢山。
みんなまじめそう。
きちんと授業を受けてくれそう。

入学式は正直邪魔だと思えた。

1秒でも早くこの子たちの声を聞いてみたいわ。

「お兄ちゃん、行ってきます」

私は兄の仏壇の前で手を合わせた。

私の名前は相川 彩花。今日から中学生。

家族は父・母、そして兄・誠の4人。

彼は生前名前の通りの人だった。

だれよりも誠実で、一生懸命で、優しかった。

けれど、そんな兄は大学生となって2年目の冬、亡人となった。

警察から聞いた死因は、自殺。

私たち家族はだれも信じられなかった。

母は嘆き、心の病を負った。

現在、入院して闘病中だ。

父は母がいない分を埋めようと、明るくふるまっている。

しかし、その後ろ姿は悲しみの色で染まっていた。

だから私も頑張ろうと決めた。

「お父さーん、入学式行こー」

「ん？あぁ、もうそんな時間か」

「そうだよー」

「よし。行こう、行こう」

そう言って、私と父は家を出た。

学校への道中、私と父は様々な予想をしあった。

何組か、友達はできるか、どんな先生か。

私たちはお互い笑ってしまうような回答を出した。

学校に着くと私は生徒席に、父は保護者席に座った。

私の隣に座ってきた子は、明らかに男に囲まれていそうな雰囲気をかもし出していた。

「はじめましてっ！私、加藤 友菜っていうの！よろしくね」

「あ、相川 彩花です。よろしく」

まさか、話しかけられるとは思わなかった。

「彩花ちゃんかー。頭よさそ！」

「・・・ありがとう」

その後も、彼女の話にしばらく付き合うことになった。

そして、ようやく入学式が始まった。

入学式はくだらない、と思っていた。

校長の話、生徒会長の話、そして担任紹介。

私はE組で、担任の名前は・・・中村 香織。

その名前を聞いた瞬間、警察が言った言葉が脳裏をよぎった。

『誠さんには生前お付き合いしていた女性がいた模様で、その方の名前は中村 香織と・・・
—』

写真も見せられた。

間違いなく、兄の想い人である。

これは、私の推理。

憶測なので、だれにも言ってははいない。

私は、彼女・中村 香織が兄を殺したと思っている。

それは、あの日兄が出掛ける前に言った言葉が関係している。

兄は「話し合ってくるから遅くなるかも」と言った。

勿論、話し合った結果自殺という線もある。

しかし、私は兄をずっと見てきて知っている。

警察は、兄はサークルに入っていたと言っていた。

もしかしたら、そのサークル仲間と話をしに行ったのかもしれない。

しかし、そんな時に“話し合ってくる”と言うだろうか。

言う人もいるかもしれないが、もし私だったらそうは言わない。

兄が私と同じ思考するとは限らないが、私は相手は一人だったとふんでいる。

つまり、中村 香織だ。

けれど、気になることは山ほどあるし、先も述べたようにあくまで憶測でしかない。
証拠だってない。
警察が動いてくれるとも思えない。

・・・誠お兄ちゃん。

入学式が終わり、各自の教室に入っても、私はもう前記のことしか頭になかった。
担任である彼女の話は全然耳に入ってこなかった。

隣が友菜ということも、終わってから気づいた。

家に帰ってからも私はずっとしかめっ面をしていたらしい。

食事をしながら父が心配そうに声をかけてきた。

「彩花、大丈夫か？」

「え・・・？あ、うん。初日だから気づかれしちゃった。今日ははやく寝るね」

「そうか。なら安心だ」

「うん」

小さく微笑んでみせたあと、私はさっさと風呂に入り床についた。

お兄ちゃん・・・・・・・・。

ベッドの中で思い浮かぶのは、太陽のような眩しい兄の笑顔だけだった。

ナカムラ カオリ・・・・・・・・。

私はある決断をした。

いいえ、しました。

先生、
復讐劇の始まりです——。